

## ● 九州

## 西田 紘子

九州の公共ホール等における音楽演奏活動は、全体的に多様化している——そんな実感がここ数年、高まっている。これらの活動を展望しようとすると、「クラシック」という従来の枠組みではもはや語り尽くすことができないことに気づく。たとえば、プロ・オーケストラがライブ・シネマ・コンサートを行ったり、地域の演奏団体が演劇とのコラボレーションに挑戦したり、といった越境的な企画がとみに増えてきた。いまいちど「クラシック」や、それ以外にも「演奏者（提供者）とお客（享受者）」といった、便宜的に使われる言葉の適否を問う必要があると感じる。

「地域発」「地域特有の」という言い回しに関しても、今後は九州「地域を超えて」の発信を期待したくなる試みが数多くあった。以下では、そのような事例に目を向けてみたい。

九州を代表する演奏団体といえば、唯一のプロ・オーケストラだった九州交響楽団である。2018年は創立65周年という節目だった。第370回定期演奏会（9月22日）では、マーラーの「交響曲第8番《千人の交響曲》」という九響初演プログラムに、小泉和裕音楽監督率いる楽団員や客演奏者、独唱者（並河寿美、大隅智佳子、吉原圭子、加納悦子、池田香織、望月哲也、小森輝彦、久保和範）、九響合唱団ら地域の合唱団、あわせておよそ500人が挑んだ。

九響は、2013年に公益財団法人に移行した際、「九響ビジョン」を制定した。そこに「演奏力の向上」が掲げられているが、そのとおり、近年の九響の勢いは目覚ましい。SNSによる情報発信効果もあいまって、遠方からの来場者も増えつつあるようだ。2019年度シーズン最後にはサントリーホールでの東京公演が予定されており、全国的な評価を得ることが、次なる課題として見据えられている。

九響ビジョンには「アジアとの文化交流」という文言もある。その収穫として、シンガポール生まれの若き指揮者カーチュン・ウォンが登壇した第367回定期演奏会（5月25日）が挙げられる。指揮者と同年生まれのウィーン・フィル首席クラリネット奏者ダニエル・オッテンザマーをソリストに招いたモーツァルト「クラリネット協奏曲」をはじめ、若き実力者たちとの共演は楽団にとって活力源となったようだ。また、この公演におけるストラヴィンスキー「葬送の歌」など、定期演奏会ではほぼ毎回、九響初演作品がとり上げられたことも意義深い。

楽団員の世代交代も進むなど、人材の流動性も増している。若返った楽団の最大の魅力は、エネルギーと一期一会の集中力にある。さらなる向上のための課題を含め、今後、どのようにサウンドや個性が変化していくのかが離せない。経営・運営面でも創意工夫がなされているなか、定期演奏会の集客や若年層への働きかけが喫緊の課題となっている。夏休みにはファミリー・コンサート（8月3日）が新たに催され、定期演奏会等のシリーズとは異なる来場者層を開拓することができた。楽団員のリサイクルや室内楽公演もいっそうアクティブになりつつある。より多様な人々にとって「あなたの街のオーケストラ」となるべく歩を進めている。

2018年の大きなニュースの一つは、北九州地域においてプロ・オーケストラが誕生したことである。北九州市と近郊の若手音楽家で結成した北九州グランフィルハーモニー管弦楽団が、山下一史の指揮のもと、響ホールで旗揚げ公演を行った（8月5日）。2019年3月には第1回定期演奏会が予定されている。北九州国際音楽祭といったグローバルな企画とともに、北九州マリンバオーケストラRIMなどの地域団体の営みも盛んな北九州。九州全体を牽引するような独自性のある試みや、プロ・オーケストラ同士の切磋琢磨が期待される。

ホール独自の演奏団体も、企画や演奏の個性、そして歴史の点で、それぞれの特徴を打ち出している。シーハットおおむらに拠点を置く室内オーケストラ、長崎OMURA室内合奏団（認定NPO法人）は、15周年を記念して初の福岡公演を行った（9月1日）。アーティストック・アドヴァイサー松原勝也のもとで地道な活動をくり広げており、今後も公演範囲を拡げてほしい。同じく認定NPO法人の響ホール室内合奏団も、仲道郁代（ピアノ）との共演で創立20周年を祝った（9月24日）。2017年に始動したアルカスSASEBOオリジナル室内オーケストラ、チェンバー・ソロイスト・佐世保は、九州交響楽団桂冠コンサートマスター豊嶋泰嗣を音楽監督に据え、トップレベルの演奏に触れる稀有な機会を創出した（3月25日）。生誕220年を迎えたシューベルトの「ヴァイオリンと弦楽合奏のためのロンド」D438が演奏されたが、これは年間テーマをもうけるMプロジェクトというホールの取り組みの一環だ。当ホールはレジデンス弦楽四重奏団アルカス・カルテットも有しており、「高いレベルの演奏を」という一貫した姿勢がみえる。一方、アクロス福岡オリジナルの合奏団であるアクロス弦楽合奏団は、質の高い演奏という面とともに、アクロス福岡ヴァイオリンセミナーの修了生との共演という要素も重視する。コンサートマスター景山誠治の牽引で次世代を育成し、ホール発のプロ音楽家を世に送り出そうという姿勢が、12回目となる定期演奏会（8月19日）にも表れていた。iichiko総合文化センターが行ったグランドオペラ共同制作ヴェルディ「アイダ」公演（10月28日）は、アンドレア・パッティストーニの魔法のような指揮のもと、木下美穂子（アイダ役）らの好演で、これまでにない活況をみせた。忘れがたいオペラ初体験となった若い来場者も多かったにちがいがなく、得がたい企画となっている。第20回記念となった別府アルゲリッチ音楽祭、地域とともにジャンル越境的な取り組みを展開する霧島国際音楽祭（第39回）や宮崎国際音楽祭（第23回）といった歴史ある音楽祭も、九州を担って久しい文化の一つである。

平成が終わる。ホールや演奏団体が、ビジョンを掲げて年間の活動を展開し、その波及効果を振り返って可視化すること——これが今後の文化芸術団体にいっそう求められていくだろう。

上質な演奏といった内容面だけでなく、音楽活動が社会生活にいかに関与しうるかも問われて久しい。九州では自然災害が耐えない。2016年4月に起きた熊本地震から2年を経た4月時点でもなお、避難生活者は3万8千人を超えた。九州内外の音楽家やマネジメント関係者が力を尽くすなか、くまもと音楽復興支援100人委員会らによる第2回熊本地震復興記念コンサート（4月16日）では、全国から有志の音楽家が集まり、被災者とともにベートーヴェンの第九を共演した（指揮者：広上淳一、独唱者：高橋絵理、清水華澄、城宏憲、甲斐栄次郎）。演奏中に涙する来場者も少なからず見受けられ、祈りの場として演奏会が機能していたように感じられた。第1部では熊本の未来を担う子供と若きアーティストがプロ・オーケストラと共演するなど、希望を導く公演でもあった。